日本人の心に記された律法と日本人の宗教意識

２０１６年5月１７日
佐々木正明

はじめに・神との関わりの中で生きている日本人

殆どの日本人は、キリスト教徒ではありません。でも、キリスト教の神と関係が無いのでもありません。昔から「仏ほっとけ、神かもうな」と言われて来ましたが、日本人がかまわなくても、神がほっといて下さらないのです。というより神は、日本列島に最初に住み始めた人間から、現代に生きる日本人に至るまで、ご自分と、ご自分に似せてお造りになった特別な存在という、特異な関係を保ち、深く関わり続けてこられたのです。

日本人にも、天地をお造りになった神に似せて造られた姿がずっと残っていて、たとえ神を知らないまま、理解しないままに生活していたとしても、決定的に、神との関わりの中で生きています。人間にはすべて、神に似せて造られた姿（創世記１：２６～２７）、すなわち心に記された律法が与えられていて（ローマ２：１５～１６）、たとえ何も知らず何も気づかずにいても、この律法に従って生きるように造られているのです。その心に記された律法の内、神の姿の良い性質というか、善性についてはすでに述べました。

神に似せて造られた人間の霊性

すべての人間には、神の善い性質に似せられた、善性とでも呼ぶべきものの他に、神の霊的な性質に似せて造られた霊性も与えられています。この霊性のゆえに、人間は霊であられる神、目で見ることもできず、科学的実験の対象として調べることもできない神を、本能的に感じ、また霊的な世界、目に見えない次元の存在を直感で感じることができるのです。そしてその霊性は、すべての動物たちの中で人間だけに与えられた、特異な能力なのです。ほかの動物には、礼拝するという宗教感覚がありません。とはいえ、神の性質に似たものとして人間に与えられた性質は、すべて、似せて造られただけであって、神と同じに造られたのではありません。あらゆる意味で無限なお方は創造主だけであって、似せて造られたものはすべて、有限の中に収められているのです。

そのため人間は神を感じ、霊的な世界を感じたとしても、あくまでも有限の能力によって感じ、限られた知力の中で考えることが出来るだけです。神を完全に感じることも知る

こともかなわず、霊的世界を説明しきることもできません。ほんのわずかに可能なだけです。そのうえ現在の私たちは、罪によって霊的能力が曇らされ、知的能力も曲げられ、神からのコミュニケーションは極めて限られているという、大きなハンディキャップのために、まさに不充分極まりないのです。そのために霊的な事柄を迷信だと笑ったり、何もわからないままに恐れたりするのです。大胆に悪霊を追い出していたイエス様の弟子たちでさえ、こともあろうにイエス様を幽霊と見間違って、恐怖のあまり叫び声をあげたほどです。（マタイ１４：２６）イエス様の弟子となって働いていたとはいえ、霊的世界のすべてを理解していたのではないからです。

救いのために与えられた文字で書かれた律法

ただ神は、罪によって心に書かれた律法を読む目が曇らされ、霊的な本能が曖昧になり、神のことが分からなくなってしまった人間に、ご自分の姿を再び明瞭に教え、罪とその結果から救い出そうとしてくださいました。そのために、イスラエルというひとつの民族を選び出し、これに、文字で書かれた律法である旧約聖書を与えてくださったのです。この文字で書かれた律法という、神からの新たな啓示によって、私たち人間は今、私たちの心に記された律法だけでは決して知り得ない、神の様々な性質やお心、あるいはご計画について知ることができるのです。

律法は、人間の宗教意識によって、作られたものではありません。人間が自分の本能や知識を駆使して、考えだしたものでもありません。それは、神がご自分を示し、ご自分の計画を教え、救い主の到来を伝えるために、一方的に与えてくださったものなのです。特に、人類に対する神の救いのご計画とその遂行については、この文字で書かれた律法と、それに続いて与えられた新約聖書がなくては、まったく知りようがないのです。

心に書かれた律法、パウロが「自分自身が自分に対する律法です」と言った律法は、人間が造られたとき、神のみ心にかなった生き方ができるようにと与えられた、人間の本質的な姿を示すものです。（ローマ２：１４）　これによって人間は、本能的に、理屈なしに、人間としての生き方をし、人間社会を築いて行けるようにされていたのです。それに対して文字で書かれた律法は、罪を犯して悪魔の支配に陥り、惨めな生活をしながら永遠の滅びを待つようになった人間を、哀れにお思いになった神が、人間の救いのための準備としてお与えになったものです。

文字で書かれた律法を知らなかった異邦人

問題は、私たちのような異邦人が、いまでも、文字で書かれた律法については無知のま

まだということです。キリストが来てくださった当時、すでに２０００年にもわたって神の教導を受け、律法も与えられていたイスラエル人には、救い主、すなわちキリストの到来と教えと働きについては、かなり明瞭に理解できたはずでした。しかし異邦人である日本人は、神についての知識も、そのお心についても、救いのご計画についても、何ひとつ知らされないで来たのです。その無知な私たちの同胞が、いま、どのようにして神について知り、その救いのご計画について理解し、無代価で提供されているキリストによる救い、すなわち信仰による救いを、受け取ることができるかが問題なのです。

その上、現代の私たち日本人は、イスラエル民族を通して与えられた律法、すなわち聖書の教えにはほとんど関心を持たず、むしろ拒絶しているという、異邦人の中でも特異な民族です。その点について筆者は、すでに様々な文章で取り扱ってきましたので、ここで深入りはしません。ただ、日本人のそのような態度の主な理由は、この教えが、植民地政策を推し進める国の人々によって、伝えられたことによるという点だけは言っておきたいと思います。

植民地主義者たちの侵略を退けようとして、秀吉や家康は、キリスト教に対する激しい迫害を行いました。キリスト教そのものに憎しみを持ったからではありません。さらに三代将軍はキリスト教禁止令という国策によって、植民地政策を推し進めていた国家から、日本を守ろうとしました。宗門帳や檀家制度などの仏教を利用した弾圧と、５人組などの日本社会の仕組みをたくみに用いた、反キリスト教キャンペーンが功を奏して、日本は中南米諸国やフィリピンのような、カトリック国の植民地にはならずにすみました。しかし２５０年ほども続いたその陰鬱な弾圧の歴史が、現在に至るまで日本人の心に暗い影を落とし、キリスト教に対して恐れと懐疑を抱かせ、よくても冷淡に近い態度を取り続けさせています。「触らぬ神に崇りなし」なのです。

その上、イスラエル民族を通して提供された救いを先に知った、西欧のキリスト教徒たちは、そういう暗い影をもった日本人に対して、文字で書かれた律法という日本人のあずかり知らない決め事をもって、日本の文化を偶像文化と糾弾し、日本人を罪人と断じることから、伝道をはじめたのです。彼らの働きを通して救いを得たわずかの日本人たちも、彼らに倣って、自分たちの宗教文化を神の律法に背くものとして見下し、散々卑しめたのです。その結果、彼らの伝道の熱意に反比例して、多くの日本人の反感を増幅させてしまいました。

西欧から来た宣教師やキリスト教徒たちの美しい貢献は、多くの日本人も認めています。特に教育や福祉に関する分野で、彼らが成し遂げた立派な働きは誰もが賞賛します。それなのに、キリスト教禁止令によって意図的に作られた、キリスト教に対する疑心暗鬼は、

多くの日本人が自覚しないほど、意識の深層に浸透し、今もまだ払拭されないままになっているのです。その上、イスラエル人に対する教導として与えられた、特異な律法をそのまま日本人に適用する、致命的間違が日本人を頑なにしてしまいました。日本人の多くは、いまだに、キリスト教を面妖な宗教であると感じているのです。

文字で書かれた律法の目的

モーセの律法、すなわち文字で書かれた律法は、あくまでも、救い主を受け入れるにふさわしい民族とするために、神がイスラエル民族にお与えになった、様々な教えと定め事を記した書物です。さらに、広義で律法と呼ばれている旧約聖書全体には、実に様々なことが、いろいろな文体で記されていますが、突き詰めると、やがて救い主が与えられるとの約束であり、その約束の実現のためのイスラエルの歴史と、イスラエル人たちの反応と心情が記述されています。その中には、全人類にも適用できる普遍的な教えもあり、最終的には全人類に及ぶべき教えも、たくさん含まれていますが、直接的にはイスラエル民族に与えられたのです。そのイスラエル民族に与えられた律法と教導を、いま、天地の創造者についてまったく知らない日本人に、そのまま適用するのは致命的な間違いなのです。

イギリスにはイギリス人のための法律があり、アメリカにはアメリカ人の法律があります。その中には、全人類にも適用できる普遍性を持った部分も、たくさんあることでしょう。あるいは全人類に向けて語られていると、解釈できる部分さえあることでしょう。しかしそれらは、あくまでもイギリス人への法律であり、アメリカ人への法律です。他国の人々に適用されてはならないものです。旧約聖書がイギリスやアメリカの法律と異なっているのは、初めから、世界の救いという前提のために書かれている点です。それでも、世界中の人間への法律と解釈してはならないのです。

全人類に共通の律法

世界中の人々に対する共通の律法は、別にあります。モーセの律法よりもはるか昔に与えられた、「心に記されている律法」であり、「自分自身」と言われているものです。（ローマ２：１４～１５）　その律法の教えは、全人類に、普遍的に与えられているのです。世界中の人々は、心に記された律法によって、社会生活を営むようにされているのです。

その教えの第一に、神を敬い尊び礼拝することです。第二は、人間同士が助け合いながら平和に生きることでした。これは文字で書かれた律法でも、もっとも大切な二つの教え、すなわち神を愛し人を愛することとして定められ、心に記されている律法を明確にし、補佐しているのです。（マタイ２２：３６～４０）　文字で書かれた律法も心に記された律法

も、同じ神から与えられたものだからです。

この心に記された律法があるため、たとえ罪によって神から隔離され、何代にもわたって神から離れた人間社会をめんめんと形成し、すっかり神のことが分からなくなってしまったとしても、人間は心の奥に本能的に宗教性を抱いているのです。だからこそ、人間の歴史が始まって以来、時や所を問わず、人種や文化にかかわらず、かならず宗教的思いの発露がありました。中には非常に堕落した宗教感覚もありますが、かなり純真な感覚が残っていることもあります。

心に記された律法をより純粋に保持している日本人

日本人は、特に、この純真な感覚に優れた、民族の一つだと思います。目に見えず、耳に聞こえず、手で触れることもできないにもかかわらず、気高く尊く大きく優しく力強い存在を感じ、神や神々とは別の存在、別の神、神という言葉では表せない神として、密かに大切にしているのです。日本人の宗教感覚の優れた点は、日本人のこの礼拝対象にあります。日本人は目に見えない存在を目に見えないまま、目に見えないものとして礼拝しています。だから礼拝の対象を絵に描いたり像に刻んだりしません。（ローマ１：１８～３２）

あるいは、自分の礼拝する対象に無限の気高さを感じるために、有限の人間の知恵と言葉で、説明しようともしません。禅宗で不立文字（ふりゅうもんじ）が教えられる前から、日本人の宗教意識の最も奥深いところ、あるいは最も高いところにあった感覚が、まさに不立文字だったのです。すなわち、文字や言葉では表すことができない存在に対する、畏敬と感謝だったのです。日本人は文字で書かれた律法は知りませんが、心に記された律法を大切にして、より純粋な形で保持しているのです。

日本人の精神の土台・神道的感覚

日本人の宗教は神道と仏教だと言われていますが、本来の日本人の心の故郷は仏教ではなく神道です。神道はまさに日本固有の宗教であり、日本人の宗教感覚の発露です。日本の文化習慣の中で、葬儀と親族関係にまつわることの多くは、仏教に取り仕切られていますが、精神文化全体は、やはり神道的な感覚という土台に立つものです。神道は宗教ではなく、日本文化だとか、日本精神だとか言われるのはそのためです。

この神道は、自分たちの礼拝対象を言葉では説明しないという、実に優れた一面を持ちながら、その美点のために多くの混乱ももたらしています。それは大きな神社に祀られる神々から、道端の小さな祠に祀られている神々に至るまで、あるいは天照大神から犬・猫・

蛇の神々まで、さらにはさまざまな化け物や妖怪や魑魅魍魎に至るまで、雑多にまた混然と神あるいは神々という言葉で表現される、多神論的信仰体系となっているのです。ここに仏教が入ってきたとき、日本人は、苦も無くそれを自分たちの信仰の枠組みの中に、取り入れることが出来ました。仏教もまた、神道の要素を取り入れ神仏習合が進んで来ました。

よく言われる「侘び寂の文化」も、ふつうに言われるような、仏教の背景を色濃く持つ茶の精神というよりも、もっともっと古くからあった日本人の神道的感覚が、そのような場で花開いたものだと考えます。侘び寂は仏教や茶道に固有というより、むしろ、日本人固有の感覚として定着しているからです。たとえば、現存する古い仏像の多くは、侘びとか寂に通じるものと言われていますが、それらの多くの元々の姿は、侘び寂とは程遠く金箔の輝くものでした。現代日本人の多くも、黄金色の眩い仏像よりくすんだ仏像を喜ぶ感覚を持っています。ところが今でも、新しく仏像を造るときには、金箔を貼るのが普通です。仏教そのものは、侘び寂ではないからです。金箔を貼ったり塗料を塗ったりしない、「自然な木目に、あるいは砂と土をざっくりと練り上げて素朴に焼いた磁器に、飾らない、手を加えない、そのままに残して説明しない、神道に通じる日本人的感覚が通るのです。奈良の都の枕詞、「あおによし」は、奈良を席巻した極彩色の仏教文化を表現していますが、日本古来の、自然をめで、侘び寂をいとおしむ、本来の日本文化とは異なったものでした。

より高度な神道的感覚と通俗的な神道的感覚

このような神道的宗教感覚を、きちっと整理して語るのは、困難を極めることでしょう。とは言え、これを大きく二つに分けることが可能だと考えます。ひとつは、見えない存在、聞こえない存在、絵でも像でも言葉でも説明もできない、気高い存在をそのまま崇める感覚です。もう一つは見えないまま、聞こえないまま、説明が出来ないままでは納得できない通俗的な心が、何とかして説明しようと試みて堕落してしまった感覚です。それが、様々な空想や恐れや人間社会の出来事と混ぜ合わされて、神話ができ、堕落した人間の臭気がふんぷんとする神々が、作り出されて行くことになったのです。

難しいのは、この高い宗教感覚と通俗的宗教感覚が、少しの切れ目もなく、日本人の心の中で渾然と存在していることです。聖書の記述をもとに推察すると、高い神意識は、神をあくまでも目に見えないお方として偶像化しない、神に似せて作られた人間の本性をより強く残している部分です。通俗的神意識は、見えない神を何とかもっと具体的に感じることが出来るように、見える神にしたいという欲求によって、動物や植物、あるいは山や海、木や天体などに変えてしまった部分です。

高度な神意識は、神を人間の思考や理論を超絶した存在として、言葉では表現できないと認め、何の説明もしないままに残しています。それをあえて説明しようとすると、通俗的な神道感覚になり、陳腐な擬人化された神話の創作が始まり、堕落した人間社会と変わらない神々の世界になってしまうのです。古事記や日本書紀に記された神話は、まさにそのようなものです。

神なんぞ存在しないという神道的感覚

日本人の多くは、神なんて存在しないと言ってはばかりません。このとき彼らがいう神とは、この通俗的な低い神意識でいう神、あるいは神々なのです。神なんていないと公言している同じ人たちが、宗教心を大切にして、決して宗教そのものを嘲笑しないのは、自分の中にある高い神道的神意識を、自覚しないままに強固に感じているためです。日本人の多くは、たとえ唯物論者になったとしても、このような高度な宗教感覚を否定しきれませんでした。神に似せて造られた人間には、神に似た霊的な姿が本能として残っていて、その本能が神道的表現として出てくるのです。

日本人の宗教を多神教だという人たちは、この日本人の宗教感覚を理解していません。八百万の神々という言葉に象徴される多神教は、日本人の低級な宗教意識の反映で、まさに単に人間より強い存在、あるいは何らかの面で上の存在、すなわち何かにおいて優れた能力を持ったものたちの集合にすぎません。「神」とは上を意味する「かみ」から来たのです。それに対して、日本人の高い神意識は、目に見えず、耳に聞こえず、言葉でも表現できない気高い存在を感じて、良くは分からないままにもこの存在を大切にし、この存在に命をいただいている、生かしていただいている、必要なものすべてをいただいていると感じて、密かに感謝しているのです。

とは言え、日本人の通俗的な神道感覚が、まったくの間違いなのではありません。ただ、「神」という言葉が混乱をもたらしているだけです。日本人は、神に似せて造られた人間としての本能によって、霊的次元を感じ取り、様々な霊的な存在を認めてきました。それらの霊的な存在を、神々という言葉で表現しただけの話で、ご自分を「ありてあるもの」と紹介してくださった神とは、まったく次元の異なった存在なのです。聖書を読むと、日本人が感じて来たこのような霊的世界が、聖書の中でも認められ、キリストも弟子たちも、それを前提として活動しておられたのです。特に、より明確な啓示である新約聖書では、日本人が神々と名付けたり精霊と呼んだりする存在は、悪霊とかみ使いとかいう表現で現わされている通りです。

聖書を通してご自分を啓示して下さったお方、天地を創造し人間をお造りくださったお

方は、本来の日本語では神ではないお方です。日本人が神と呼ばない、名前のないお方、姿も見えず声も聞こえないお方、心で感じ、畏敬の念を持って崇め感謝を捧げて来たお方こそ、聖書でご自分を啓示して下さったお方なのです。

情をお持ちになる方

日本人はまた、この存在を、単なる宇宙の真理とか力とか定理とかいう、情を持たない冷たいものとして放っておかず、むしろ愛し憎みまた喜び悲しむ、意識と情を持った「お方」と認識したのです。とは言え、その情はべたべたとくっつく情ではなく、遠く離れながら決して離さず、幸せを願いすべての物事を整え、じっと暖かく見守っていてくださる情でした。まさにそれは、罪を犯した人間を追放しながら完全に無縁になさらず、ずっと支え続けて救いの道を準備して下さった、天地の創造者であるお方を思わせるものです。一羽の雀が、地に落ちて死ぬこともご存知の上で、空に遊ぶことを許しておられるお方です。

これは豊かで温和な自然環境に恵まれ、他の民族に蹂躙されることもなかった日本で、多くの人々が普通に思い描く気高い存在です。この優しく包み込む自然は、優しく包み込む気高く尊い存在を想い起こさせたのです。険しく厳しい自然環境の中で、多くの異民族との戦いに継ぐ戦いの中で生き、神の民にふさわしく成長すべく、試練と懲罰とを受けながら不従順と反抗とをくり返し、長く過酷な星霜を過ごさなければならなかったイスラエル民族には、同じ神が恐ろしく峻厳な神と思われたことでしょう。

その恐ろしい神のイメージを、「父」という優しい呼び方をもって、表現し直したのがキリストです。多くの日本人には、聖書に記されている父なる神という言い方が、あたかも厳しく恐ろしい神を表現しているかのように思われていますが、実はまったく反対で、「慈父のような神」という、優しさを現わした言葉なのです。有名な放蕩息子の譬えは、まさにそのような神のイメージを際立たせています。（ルカ１５：１１～３２）

使徒パウロは、「アバ父」という特異な言い方で、慈愛に富む神を表現しました。（ローマ８：１５）これはキリストが用いておられたアラム語の「父」、すなわち「アバ」と、新約聖書が書かれたギリシヤ語の「父」を、重ね合わせた表現です。また「アバ」には堅苦しい父のイメージがなく、日常生活の中で頻繁に使われていたもので、幼児語だったとも言われています。キリストが「父なる神」についてお語りになったとき、たぶん、この「アバ」という言葉をお用いになったのではないかと思われます。

母なる神としての創造者

昔、ウーマンリブが盛んだったころ、「父なる神」は女性差別だと言われ、「母なる神」と翻訳された、「Mother Bible」なるものが出版されたと、噂で聞いたことがあります。本当にそんな聖書が出されたのかどうか、興味もないので調べたこともありませんが、ひとつはっきりさせておかなければならないのは、神に性別はなく、男でも女でもないということです。むしろ男の特性と女の特性を完全な形で兼ね備えておられるのが、私たちの神です。人間が神に似せて造られたというのは、一人の男が神に似せて造られたのでも、一人の女が神に似せて造られたのでもなく、男と女が一つとされて、神のイメージをよりまどかに現わすものとされたのだと思います。（創世記１：２６）

父のイメージが強く表れている旧約聖書の神にも、母のイメージを被せられた表現も出てきます。旧約聖書の時代から、神の優しさ、愛情の深さは、母のイメージで表現されていたのです。（イザヤ６６：１２～１３）また、父と母が並列されて、人間に対する神の愛情の深さが語られた場合もあります。（詩２７：１０）　「たとえ、女が自分の乳飲み子を忘れても、神はお忘れにならない」というよく知られた表現でも、神の中の母のイメージが強調されています。（イザヤ４９：１５）

優しく穏やかな恵み深い自然に囲まれ、その中に神的なものを認めて来た日本人は、たしかにその自然と重ね合わせた神感覚を抱いています。母なる大地という言葉と母なる神という感覚が重なるのです。しかし、もしも私たちが、聖書にご自分を啓示しておられるお方を正しく認識するならば、このお方こそ、まさに母なる神でもあられるのです。

日本人が求めている神・聖書の神

日本人は情緒的な民族です。もちろん法律も契約も存在しますし、それらを高く掲げてもいます。日本は法治国家だからです。それでいながら、情による超法的な判断や判決も受け入れられています。特に日常的な事柄においては、法だとか正義だとかいうものを前面に出し、振り回し、杓子定規に考える人間を軽蔑する傾向があります。三方一両損のような大岡裁きに人気があるのです。日本人の特徴はその情にあります。情の分からない人間は人間として未熟です。酸いも甘いも嚙み分けるのが、大人の人間だと考えられるのです。

その点、西欧から来たキリスト教の神は、日本人の肌に合わないのです。なんでも白黒で決着をつけたがるからです。正義が重んじられ、正直が尊ばれ、嘘が憎まれます。「ハイはハイ。イイエはイイエ」というキリストの教えが、おかしく理解されて適用されています。間違って貼り付けられた旧約聖書の父なる神のイメージが、日本人に嫌われるので

す。ところが、聖書の神は西欧から来たキリスト教の神とは、別の顔を持っておられます。

聖書の神は、「犠牲よりも憐れみ」を好まれる神です。（マタイ１２：７） 厳格な律法の適用よりも、情けを大切にされるのです。西欧的キリスト教徒は認めたくないと思いますが、神は、嘘さえお用いになっています。聖書の中には、嘘をついた人間がその嘘のために神から祝福を受けた例が、いくつも記されていまし、キリストも嘘をついています。父なる神ご自身が、罪を犯した人間は必ず死ぬと宣言されても、その人が悔い改めるならば生きるとおっしゃり、嘘をひとつのレトリックとして用いておられるのです。その嘘を単なる嘘としてではなく、神の愛の情の発露として用いておられるのです。

贖いのみ業自体が、愛という情のために起こった出来事です。正義を貫くだけならば、十字架は不要です。正義を犠牲にしないで、愛を貫くために贖いが遂行されたのです。放蕩息子の父親は、正義を執行しなかったばかりか、正義の正論を吐いた長男をたしなめています。姦淫の場で捕えられた女を、イエス様は石打ちにすることを望まれませんでした。大岡裁きは三方一両損ですが、神の裁きは、神だけが大損をするキリストの十字架の死でした。

日本人に福音を語るとき、日本人が知らない、文字で書かれた律法を通して語るのではなく、日本人の心にも書かれている、文字によらない律法を通して語るべきです。日本人を偶像礼拝の罪人と見るのではなく、見えない神を見えないままに礼拝している人々と理解して、私たちもまた、見えない神を見えないままに礼拝している、同じ人間であることを語るべきです。確かに、日本人も偶像礼拝の要素をたくさん持っています。しかしそれらの偶像のほとんどは、見えない神、真実の神を偶像化したものではなく、「神々」という全く異なる次元のものの、可視化に過ぎないことを知らなければなりません。

偶像と依代（よりしろ）

日本人は神社を建て、ご神体と呼ばれるものを祀り、それらに向かって礼拝（らいはい）します。表面的に見るとこれは偶像礼拝だと思われます。しかし、日本人が神社に参拝するとき、決して偶像を拝んでいるのではないのです。その昔、伊勢神宮に参拝した西行法師が礼拝したのは、神宮が祀る天照大神でも、その偶像でもありません。神宮に偶像はないのです。また彼は真言宗の僧侶でしたが、ここで彼が感じ拝んだのは、仏でもなかったわけです。彼は、「どのような方か分からないお方」を、「なにごとのおはしますかはしらねどもかたじけなさに涙こぼるる」と言って、礼拝しているのです。

殆どの日本の神社には、ご神体という言葉はあっても、ご神体は実在しません。何かが

置かれていたとしても、それはご神体ではありません。それは依代にすぎないのです。また神社自体が大きな依代なのです。依代という言葉がもうあまり使われなくなっていますので、説明が必要かもしれません。要するに、目に見えない、手で触れることもできない、言葉でも説明できない実体を象徴し、その象徴を通して実態を実感できるようにしたものです。きわめて偶像に近い、類似した存在ですが、偶像にはなっていないのです。

たいへん興味深いことに、徹底的に偶像礼拝を禁止したモーセの律法の中に、この依代が取り入れられ、定められているのです。それらの依代は神の臨在を示すものですが、神は遍在のお方であり、いつでも、どこにでもいらっしゃるお方ですから、私はここにいるなどと言わなくても良いお方のはずです。しかし、人間の弱さなどの要因に配慮して、神はご自分の臨在を示す依代をお与えになったのです。それはまず、会見の幕屋といわれる天幕であり、それが固定化した神殿です。ソロモンは神殿を建て終わったときに、「神はこのような建物にはお住みにならない」と、まるで神殿の価値を損なうようなことを言っています。しかし、神殿は神の臨在を象徴し、人間にそれを思い起こさせる役割を果たしたのです。同時にまた、神は罪人と距離を置かれるということも示していました。

神がお与えになった依代の、さらに顕著な例は、会見の幕屋の中でより強く神の臨在を示すといわれた聖所であり、その一部でさらに聖いといわれた至聖所であり、そこに安置されていた契約の箱です。契約の箱は神の箱とも呼ばれ、神の臨在を非常に強く示すものであり、不用意に取り扱うとたちまち死が待ち受けていました。（Ⅱサムエル６：２～１１）　その箱の中に収められていた三つの物、アロンの杖とマナと十戒が刻まれた石板も、神の臨在を強烈に示していました。モーセが「ありてある」お方にお会いした、あの燃える柴のあった土地も、燃える柴自体も、依代だったと考えられます。（出エジプト３：～６）荒野で神に背いたために、蛇に噛まれて多くのイスラエル人が死んだとき、神に命じられて造った蛇の彫刻は、ほとんど偶像に近いものでした。イスラエル人はこれを見上げるならば、死なないで済んだのです。しかし、これは偶像礼拝ではなく、神への忠誠と信頼を示すものでした。

モーセの律法で認められ、イスラエルの歴史の中で重要な役割を果たしたこれらの依代は、偶像ではありませんでした。イスラエル人たちは、これらの依代に向かって礼拝をしたのですが、偶像ではなかったのです。ではなぜ、日本人の見えないお方に対する信仰心の表現である依代が、偶像として非難されなければならないのでしょう。むしろ、非難されてはならないものであり、大切にされるべきものではないでしょうか。

私たちは、神社やその中に収められていることもある依代を糾弾するのではなく、むしろ、それらを通して見えないお方、「ありてある」と仰せられるお方について、お話しす

ることが出来るはずです。幕屋、聖所、至聖所、そしてそこに安置された契約の箱と、その中に収められた三つのものという、モーセの律法で定められた依代と、神道の依代に共通性を見て、そこから天地を創造されたお方について、話ができるのです。日本人は文字で書かれた律法を持たず、心に記された律法だけで、ここまでたどり着き、これほど真摯に見えないお方を崇めているのです。

万物に潜む唯一のお方

日本人は、すべての自然物に、目に見えない霊的な存在が潜んでいると、感じています。被造物を通してご自分を現わしておられる、目に見えないお方を目に見えないままに感じて、目に見えないままに礼拝しているのです。（ローマ１：１９～２０） それが低俗な信仰心になると、精霊や魑魅魍魎の類になってしまいますが、高度な信仰心では、目に見えない、大きく、気高いお方が、潜んでおられると感じています。しかも、いろいろな日本人と話してみると、この目に見えない気高いお方はたくさんいらっしゃるのではなく、お一人に違いないと感じている人が多いのです。この感覚をきちっと説明できる人に出会ったことはありませんが、多くの日本人はたくさんの神々ではなく、唯一の神を感じていると言って、間違いなさそうです。

では、名だたる神社に祀られている有名な神々を、日本人はどのように理解しているのでしょう。これも定かな答えを得ることはできませんが、どうやら、それらの神々は唯一の神の象徴、あるいは権化（仏教の言葉ですが）、垂迹（本地垂迹＝ほんじすいじゃくの垂迹、仏が日本では神道の神として、仮の姿をとったという考え方の仮の姿）仮の姿、見えない存在者のある面を現わしたものなどと考えているようです。太陽を擬人化した天照大神は女神であって、まさに母なる神ですが、それは、あらゆる命と恵みの源である、見えない存在の性質を現わしたものです。日本人はあたかも太陽を礼拝しているように見えますが、それは物質としての太陽ではなく、太陽に現わされている見えないお方を礼拝しているのです。

日本には八百万と言われる神々が存在します。しかし、それらは単なる「うえ」の存在である「かみ」に過ぎず、聖書が言う、人間より多少優れた存在として造られたみ使いに近い存在であって、（ヘブル書 1 章参照）本来、礼拝の対象ではありません。礼拝の対象は、目に見えない、気高く、尊く、恵みに溢れた、力強いお方であり、あらゆる命の源であられるお方なのです。ただ日本人は、ギリシヤ思考に影響された西欧のキリスト教徒たちとは違って、このお方を説明しようなどと思わず、神学を構築しようなどとも考えません。そのために、きわめて曖昧な意識に留まって、自分でも良く分からないまま、心に記された律法に頼って、感覚で礼拝をしているのです。

日本人の礼拝を偶像礼拝だと言って非難せずに、むしろ日本人は、文字で書かれた律法で、改めて自己啓示をしてくださった天地創造の神を、心に記された律法に従って礼拝しているのであると、考えるのが良いと思います。私たちクリスチャンと同じ神を礼拝していると、理解するのです。もちろん、心に記された律法は文字で書かれた律法のような知的なものではありません。むしろ本能的感覚です。その中には、罪のために捻じ曲げられたり、壊れたりした部分もあることでしょう。理解不足のための間違いもあれば、欠陥もあることでしょう。しかし糾弾するのではなく、同調と同情を持って、日本人の信仰を受け入れてあげることができるはずです。アテネの偶像礼拝者たちを前にして、パウロが取ったと同じアプローチをするのです。

あとは、日本人が知らないで礼拝しているお方、本能で崇めているお方が、天地の創造者であると教えて上げるだけでいいのです。この天地の創造者が、万物を超越し、万物を貫き、万物の内に住み、万物を内に収めておられる方であると教えてあげるのです。（エペソ４：６、使途１７：２８）

罪と恥

ルース・ベネディクトというアメリカの人文学者は、戦後まもなく出版した著書「菊と刀」の中で、人間関係をもっとも重要視している日本人は、恥の意識は強く持っているけれども、絶対者を信じていないために、罪の意識には欠けているというようなことを言っているそうです。日本に足を踏み入れたこともない人が、よくもここまで、日本文化と日本人の意識について分析できたものだと感心します。ただしこの分析は、キリスト教文化圏にいる人が、キリスト教的な判断をしただけで、正しいとは思えません。

確かに日本人は、長い間、非常に強い定着文化の中に生きていたために、密接な人間関係の中で倫理観を育てて来ました。そこで互いの目を気にし合って、恥の感覚を増したことは充分に考えられます。それで、その人間関係の縛りが弱まると、「旅の恥はかき捨て」などということになるのも自然です。しかし日本人にも、強い罪意識があることを知らなければなりません。キリスト教文化の罪意識とは幾分異なっているとはいえ、罪意識がないというのは極めて乱暴です。

アメリカの日曜学校で神様の絵を描かせたところ、子供の一人が、全身がたくさんの目で覆われている、翼を持った人間の姿を描いたという話を聞いたことがあります。神様の姿を描かせること自体が愚の骨頂ですが、キリスト教文化の罪意識は、いつでもどこでも見張っておられる、怖い神様の刑罰が恐ろしいという罪意識です。この神が定められた律

法に違反してはならないのに、自分はどこかで違反してしまっているかもしれないという疑念です。

ところが多くの日本人の罪意識は、怖い絶対者に対する恐れではありません。むしろ、自分自身に対する恥です。他人の目を恥じるよりも、律法である自分自身に恥じるのです。自分自身の心に書かれている律法に恥じているのです。これを日本人は普通、良心に恥じると言います。これはとりもなおさず、心に記されている律法に照らし合わせて、自分は足りない、不足しているという感覚なのです。

その感覚は、目に見えない気高く尊いお方を怖がることには、直接つながりません。日本人が感じているこの至高のお方は、罰するお方ではなくお赦しになるお方だと、感じられているからです。それでいながら日本人は、この目に見えないお方の前に出ることを恥じるのです。それは自分がこのお方にはふさわしくない、何かが不足している、欠けている、申し訳ないと本能的に感じるからです。自分の良心に、気高い方の姿を重ねているのです。

だから、具体的にどのような罪があるから、どんな悪いことをしたからというよりも、自分はこのお方の前に出るにはふさわしくない、穢れた存在だと感じているのです。罪意識というよりは、穢れの意識と言うほうがよいかもしれません。これは律法を破ったからという恐れの罪意識よりも、ずっと深い罪意識です。

日本人の罪意識の高さ

日本人の罪意識の高さは、その倫理観の高さに現れています。もちろん、悪い人間はどこにでもいます。日本も例外ではありません。それでも、落とした財布がかえって来る確立が、非常に高い国が日本です。犯罪率が異常に低い国が日本です。筆者はちゃらんぽらんな人間ですから、車のドアに鍵をかけることはまずありません。でも、日本で盗難に遭ったことはありません。ボロ車を運転していたからという理由もありましたが、長く住んでいた「キリスト教国」を自認する国では、どんなボロ車でも、どれほど頑丈に鍵をかけていても、幾度も盗難に遭いました。

敗戦後、大陸から引き揚げてくる大勢の日本人たちを、船で運ぶ任務に就いたアメリカ兵たちは、極限状態の中でも老若男女が規律正しく行動する姿を見て、一様に驚嘆しまた賞賛しています。それと同じ精神が、東日本大震災のときにも、熊本大震災のときにも現れていました。同じような天災に傷つけられた国々に見られた、暴動や略奪はまったくなかったのです。警察どころか軍隊まで出動して、自動小銃を持って警護していても、あま

りに多い暴徒や略奪者を前にして、何もすることができない海外の様子が、幾度も報道されていました。

これは法律だとか刑罰の問題ではありません。人間としての行動の問題です。人間を尊び合い、愛し合い、助け合うという、心に記された律法に従っているのです。この事実を私たちが認め、より多くの日本人の中にしっかりと残っている、神の姿を認めて上げることが肝要です。

聖書が教える罪を理解してもらう

もちろん、すべての日本人にこのような感覚があるというのではありません。また、その感覚が恥の感覚よりも強いというのでもありません。ただ、日本人の罪意識は一般に、キリスト教文化の中で育った人たちの罪意識よりも強く、深いところにあるということです。なじみのない文字で書かれた律法をもってではなく、まず、心に書かれた律法という、全人類に共通の律法をもって接触するならば、日本人にも聖書の教えを理解してもらえるはずです。日本人の穢れの意識、あるいはふさわしくないという怖れの意識から、聖書が教える罪の自覚に導くのが、より効果的だと思います。

日本人は強い穢れの意識をもっているために、神社の境内には必ずと言ってよいほど、清めのための水が置かれています。しかもその水が自分の穢れを完全に洗い流すとは感じられず、怖れとおののきをもって礼拝するのです。とはいえ、その穢れや罪の意識が希薄な日本人もたくさんいます。自分が犯した犯罪に対してきちっとした謝罪も償いもしないまま、勝手に禊（みそぎ）をすませ、水に流してしまうところは、大いに糾弾されるべきだと考えます。日本人には強い罪意識と共に、人間は罪を糾弾し尽くすのではなく、赦すことも知らなければならないという温和な集団主義と、恵み深い母なる神は赦してくださるにちがいないという、甘えがあるのです。その甘えを通して、徹頭徹尾お赦しになる神について語ることも可能です。

ただ少なからず心配なのは、聖書が教える罪についての教えを、浅くしか理解していないクリスチャンが多いことです。教える宣教師や牧師の理解が、アメリカの日曜学校レベルなのかも知れません。それでは、到底、正しい罪の自覚に導くことはできません。神はイスラエル人に罪の自覚を持たせようと、ずいぶん苦労されました。キリストもユダヤ人たちに罪の自覚を持たせよとして、逆に憎まれています。日本人に罪の自覚を持たせるのは、それほど難しいとは思えません。

恩知らず・不孝と不義理

日本人は、恵み深い母なる神を感じながら生きて来ました。しかしその神意識が、あまりにも薄くぼんやりとしているために、果たしてその恵みに充分な感謝を捧げてきただろうかと、不安に思うところもあります。

人の恩に報いなければ、恩知らずと罵られます。苦労して育ててくれた親に感謝して大切にしなければ、親不孝と叱られます。日ごろの親切にお返しをしなければ、不義理を重ねていると批判されます。現代では少しずつ薄れているかもしれませんが、まだまだ多くの日本人に残っている大切な感覚です。

では私たちは、目に見えない恵み深いお方に、その恵みと祝福にふさわしい感謝を捧げ、きちっとお礼をしてきたでしょうか。このお方のことが良く分からないこととあいまって、感謝もお礼もおろそかにしてきたというのが実感です。目に見えなく気高く恵み深いお方に対して、恩知らずな態度をとって、不孝や不義理を続けているという事実に気づいてもらい、申し訳ないという気持ちを強くしてもらうと、罪というものを律法と違反の関係としてではなく、神と人との間の問題、人間関係と同じ「道義の問題」として理解してもらえるはずです。

罪というのは、本来、律法に対する違反ではなく、人間関係の道義に反することなのです。その道義に反することを具体的に表わしたのが律法です。まだまだ律法にはされていなくても、道義に反することはたくさんあります。時々間違って、法律に反していないから罪ではないと主張する人が・・・特に政治家たちの間にたくさんいます。たしかに法律に違反していないから、法律上は犯罪ではありませんが、道義に反しているならば罪なのです。

気高く尊く恵みあふれるお方に対して、道義に反したことをしていたならば、文字で書かれた律法には明文化されていなくても、罪なのです。神の聖く正しい性質と愛の性質、そして感謝と礼拝を求める至高の性質に反しているならば、それは罪なのです。そのことは、たとえ文字では書かれていなくても、心に書かれた律法が教えてくれます。こうして罪の自覚に到達すると、当然、このような自分が、どうして聖く気高いお方に近づくことができるか、正しくふさわしい礼拝を捧げることができるかという、重要な問題に行き当たるのです。

救い主

ここに至ってはじめて、神の赦しのご計画、救いのみ業について、意義深く話すことが

出来るようになります。救い主の話も、十字架の話も、信仰による義も、悔い改めも、神が罪人を赦し、ご自分のみ許に引き寄せるためのものであると、感動的な愛の福音として語ることができるのです。造り主であるお方に対する感謝に溢れ、自分の罪意識がはっきりして、初めて十字架が感動的な愛の物語となるのです。文字で書かれた律法によって育てられていない日本人には、永遠の滅びの脅しと共に十字架を語っても、受け入れられることはまずありません。スポルジョンという稀代の名説教家は、「地獄の火の裁きの恐ろしさに、震え上がるような説教をせよ」と語ったそうですが、イギリスでの効果を日本で期待しても無理な話です。

文字で書かれた律法によって救い主の到来を約束され、何世紀にもわたって待ち続けていたユダヤ人にとって、救い主への信仰は当然の条件でした。また、この律法に続く新約聖書によって救い主キリストの到来と働き、さらにその働きの結果である代価なしの救い、すなわち、信仰による救いを教えられていた、プロテスタント・キリスト教文化の人々にとっては、キリストの贖いの働きに対する信仰が要求されるのも、自然のことです。

そしてここで言われる信仰とは、むしろ「信頼」と言った方が良い、あるいは分かりやすい心の状態です。人々は単純にキリストに信頼することによって、救いを得ることが出来たのです。それこそパウロが徹底して主張した信仰による義であり、普遍的な福音、つまり、全世界の人々への福音でした。

しかし、救い主について何の予備知識もない人々、文字で書かれた律法もそれに続く新約聖書も与えられていない日本人にとって、キリストへの信仰あるいは信頼は、非常につかみどころのないものです。日本人に福音を語るとき、キリストと十字架を最初に持ち出して、神の愛と救いから始めようとすると、大変困難なことになってしまいます。

キリストの救いは行いによらないもの、代価によらないものです。ですからキリストの救いは、キリストの救いの神学を理解するという、「非常に困難な行い」によらないでも、得ることが出来るものであるはずです。そのような困難な行いを必要とさせないために、キリストは贖いを完成して下さったはずです。キリストの十字架による救いは、キリストの十字架による救いを知らなくても、理解できなくても得ることができるように、完遂されたものなのです。それでこそ、救い主です。

アブラハムの信仰

パウロは、キリストへの信仰による救いを論証しているとき、突然、アブラハムが信仰によって義とされたという創世記の記述を持ち出して、自分の神学の正当性を主張しまし

た。（ローマ４：１～１３、ガラテヤ３：６） パウロは、何の困難も感じないで、キリストへの信仰を、神への信仰に変えてしまったのです。キリストの出現よりも２０世紀も前に生きたアブラハムは、キリストのキの字も知りませんでした。十字架についてもまったく無知でした。しかし、彼もキリストの贖いのみ業のゆえに、義とされることが出来たのです。アブラハムだけではなく、モーセやダビデをはじめとする旧訳時代の義人たちは、みな、キリストを知らないまま、キリストの十字架のゆえに救われているのです。彼らはキリストではなく、神に対する信頼によって、キリストの救いを獲得したのです。

では私たち、律法を持たない日本人はどうでしょう。キリストすなわち救い主について、何の予備知識も与えられていないまま、キリストを信じなさいと言われても、無理な話です。日本人は、キリストを信じる前に、天地の創造者であるお方を、はっきりと認識する必要があるのです。そしてそのお方をしっかりと認め、そのお方を信頼することによって、日本人もアブラハムやダビデのように、そのお方が準備して下さったキリストの救いを得ることが出来るはずです。

いつ救われるのか

アブラハムが義とされたと記述されている出来事には、アブラハムの罪の悔い改めも、罪の告白も、信仰告白さえもありませんでした。義とされた信仰自体が、救いに対する信仰ではありません。救いなどという言葉は、アブラハムには何の意味もありませんでした。アブラハムの信仰は、単なる、そして純真な意味での神への信頼です。神がおっしゃる通り、自分は年老いていても世継ぎの子供を持ち、その子供から子孫が増えて夜空の星の数ほどになる、神がそのように約束して下さるなら、そのようになると信じただけです。

しかもその信仰は、堅く揺るぎのないものではありませんでした。神の約束の成就を待ちきれず、妻サライの言葉に乗って、エジプト人の召使との間に、子供をもうけてしまった通りです。それでも、パウロはアブラハムの信仰を強調し、その信仰は「堅く、 弱らなかった」と言っています。（ローマ４：１８～２２） またヘブル人への手紙の著者は、アブラハムだけではなく、妻サライの信仰さえ模範として引き出しています。(ヘブル１１：１１） 神はそれほど不確実な信仰さえ、義とするのに充分だと認めてくださり、パウロに「堅く、弱らなかった」とあえて言わせてくださったのです。そして、実際にアブラハムは信じ続けたのです。ただその信仰は、現代のプロテスタント信仰を教えられた私たちが見ると、はなはだ不確実なところもあったということです。それだけ、プロテスタント信仰は厳しいということです。

アブラハムの信仰には波がありました。強くなったときも、弱くなったときもあったの

です。しかもアブラハムが信仰を認められたのは、子供を与えるとおっしゃった神を信じた時、その瞬間ではありませんでした。アブラハムの信仰は、相続地を目指して旅を始めた時から、ずっと継続していたのであって、（ヘブル１１：７～１２）「義と認められた」と言われたときは、彼の信仰態度がそこで改めて確認されたに過ぎないのです。ですから、ヤコブは信仰には行動が伴うことを強調して、アブラハムが義とされたのはイサクを捧げた時であると言えたのです。（ヤコブ２：２１～２４） 厳格な聖書釈義によると、アブラハムは二度も義とされたことになってしまいます。

私たちは、キリストの十字架の贖いを信じて罪を告白した時に救われるという、西欧プロテスタントの福音主義的伝統から脱却しなければなりません。いつ救われるのかというのは、人間が判断することではありません。信仰は一瞬の出来事であると同時に、継続的な心の変化でもあるのです。どこかの一瞬に凝縮される表現があったとしても、それだけを強調してはならないものです。

私たちは、文字で書かれた律法を持たない日本人が、救われるにふさわしい信仰を持つにいたる道のりは、西欧キリスト教国の人々よりかなり長くなることを知っています。また、義と認められる瞬間がどこにあるか、充分に説明することはできません。天と地をお造りになったお方を認めて、そのお方に感謝し信頼を寄せたとき、つまり、アブラハムのような信仰を持ったときか、あるいは自分たちの感謝が足りず、不孝・不義理の罪を犯していたと気づき、お詫びを申し上げたときか、はたまた、キリストを通しての神の救いのご計画を知り、キリストが成し遂げてくださった十字架の贖いの御業を知り、感謝と悔い改めをもってキリストを救い主として信じたときか、大いに考える余地のあるところです。

誰を信じるのか

ところが現実には、ほとんど何の考察も議論もないまま、キリストを信じる信仰が強調され、キリストを最初に語らなければ、正しい伝道ではないかのような感覚があるのです。筆者は、日本人が救われるために必要なのは、アブラハムのような信仰で良いのだと考えています。私たちがキリストを信じているか、十字架の贖いを理解しているかは問われないのです。そういうことが問われなくても良いように、キリストの完全な贖いのみ業が成し遂げられたのです。問われるのは、天地を創造し、人間を造り、生かし養っていてくださる神を信頼するかどうかです。その神は、キリストを通しての贖いを計画し、十字架をもってそのご計画を完遂して下さったほど、私たちを愛してくださるお方なのです。

乳房にむしゃぶりつこうとする赤子に対して、自分の命を危険に晒して出産した母親が、自分の苦労と苦しみと決断の美しい話を理解しなければ、乳を与えないなどと言うことは

ありません。そんなことは、本来、子供が知らなくてもいいのです。子供は乳を飲み、愛を感じ、感謝と喜びを持って生きればそれで良いのです。母親は子供の知識に応えるのではなく、子供の信頼に応えるのです。信頼を得るだけで母親は満足なのです。もちろん、理解力ができてから母親の出産にまつわる話を聞けば、感謝と愛とがますます強くなり、母子の絆はいよいよ強くなることでしょう。

文字で書かれた律法を持っていたイスラエル人が、キリストに対する信仰を問われたのは当然です。でもイスラエル民族の父であったアブラハムは、まだ律法を与えられていなかったとき、すなわち、異邦人と同じ立場にあったとき、天地創造の神だけを信頼して義とされたのです。しかもアブラハムは、天地創造の神が唯一絶対の神だとは、まだ理解していなかったように思われます。多くの神々の中で、最も力ある神であり、また信頼に足りる神であることを感じて、・・・学問的に比較宗教のリサーチをして理解したのではなく、体験を通して実感して、信頼したのです。

おわりに・日本人には日本人に適した福音の伝え方を

私たちは、異邦人である日本人に対して、イスラエル人に対するような福音の伝え方をしてきました。また、西欧キリスト教文化に生まれ育った人たちに対する、伝統的な伝道の仕方を真似て、長い間くり返してきました。現在も、懲りずにくり返しています。まったく事情の異なる諸外国からの、成功した伝道者や牧師を招いて、一所懸命に彼らから学ぼうとしています。その努力は認めますが、何かが欠けています。

高カロリーの食べ物でも、幼児には幼児にふさわしい調理をして与えます。老人には老人に喜んでもらえ、食べやすく消化しやすく、しかも栄養過多にならないように、料理に気を配ります。聖書を学び神学を学ぶことは大切です。しかし、その知識をどのように伝えるかによって、その学びを生かしも殺します。どのように伝えるべきかは、伝える相手を理解しなければ、知ることが出来ません。

私たちは、私たちが福音を伝える相手、私たちの同胞、異邦人である日本人を理解しているでしょうか。その宗教性、信仰の感覚、霊的本能とその発露を、理解しようとして来たでしょうか。私たちは日本人だから、日本人を知っていると思い込んではいないでしょうか。あるいは、日本人も西欧人もアジア人もみな同じ人間だ、同じ罪人だと、大雑把に、いわゆる十把一絡げで対処して来たのではないでしょうか。

そのような伝道方法でも、通用した民族もたくさんあります。日本人も、カトリックが入ってきたときの精神状態は、まだそれでもある程度通用したと思われます。またその時

のカトリックの伝道は、主にイエズス会の融和的な伝道方法であったことも、大いに関係があるでしょう。しかし、現在はその時代と違います。カトリックの侵入に対して、仏教を用いた防御対策が国策として採られ、明治の開国時には、国家神道によって、新旧キリスト教に対する防御政策が敷かれました。その影響は、知ると知らないにかかわらず、現代の日本人の心にも色濃く沁み込んでいます。

第二次世界大戦の後、マッカーサーによって実行されたアメリカの支配によって、キリスト教への期待、あるいは好感度はかなり上昇し、一時的に伝道がしやすい時期が訪れたと言われています。しかしその好感度は、日本人クリスチャンの増加にはほとんど結びつきませんでした。それのみか、ベトナム戦争におけるアメリカの理不尽さを見せられ、アメリカの良心と思われた、キリスト教に対する好感度も下降し続けています。さらにコミュニケーションや情報が格段に容易になって、アメリカをはじめとする西欧キリスト教文化にある国々の、身勝手さや醜さを容易に知ることが出来るようになった現在、昭和２０年代、あるいは３０年代の伝道のしやすさは、もう日本にはないのです。

いま私たちに必要なことは、福音を語る対象をしっかり学び、その対象にふさわしく福音を語ることです。日本人が福音だと感じるように、福音を語らなければなりません。その時に必要なのは、文字で書かれた律法を通して福音を語るのではなく、心に書かれた普遍的な律法を用いて、充分に天地の造り主、「ありてある」とおっしゃるお方を知ってもらい、そのお方に対する信頼を築けるようにしてあげることです。そのあとに、キリストの十字架をお話ししてあげるならば、文字で書かれた律法を持たない異邦人の日本人にも、福音が福音として伝わるのではないかと考えるのです。

筆者はここ１０年以上、このようなことを考え続け、折に触れて文章でも著して来ました。そして１年半ほど前から、実際に、このような方法で個人伝道を試みる機会がありました。その結果、８０歳ほどの老夫婦が、困難な理屈のつまずきを体験することなく、素直に神を信じ、贖い主であるキリストを信じることができ、昨年の暮れには二人そろって洗礼を受けました。年齢のために、滴礼でしたが、私が薦めたのではなく、本人たちが強く望んだのです。夫はそれからわずか３ヶ月で、平安のうちに召されて行きました。

この伝道法で救われた女性がもう一人います。不治の病のために入退院をくり返し、傍目から見ると悲惨な状態ですが、彼女も週一回、数ヶ月の短い訪問の結果、自分が幼いときから感じてきた、目に見えない尊いお方が天地を創造された神であると認め、「天地をお造りになった神様」と祈るようになりました。それから自分の恩知らず、不孝・不義理の罪を認め、悔い改め、救い主イエスの十字架に感謝するようになるまでは、ほんのわずかの期間でした。彼女への伝道の記録は、「私の個人伝道」という文章で、ブログ上で紹

介していますので、お読みくだされば幸いです。